

令和6年度 教育活動等に対する学校評価書

令和7年3月5日 学校法人大村学園 かわはらいづみ幼稚園 園長 宮本真美
学校関係者評価委員長 中村峻汰

- 1 幼稚園の教育目標 明るく元気な子 ～ 明るくたくましい心身共に健康で情操豊かな人間としての基礎をつくる ～
① 元気に登園する子 ②友だちとなかよく遊ぶ子 ③元気にあいさつをする子 ④好き嫌いをしないで食べる子
- 2 本年度の重点目標 計画性のある保育実践・笑顔で保育実践・信頼される保育実践
- 3 自己評価結果とそれに対する学校関係者評価結果 (A・十分に成果があった B・成果があった C・少し成果があった D・成果がなかった)

評価対象	評価項目	自己評価		学校関係者評価委員会	
		評価点	反省と改善策	評価点	意見
教育目標	教育目標の具現	A	本園では、教育目標「明るく元気な子」を目指し、人・もの・ことの関りを通して、子ども一人一人の人間形成に努めている。 子どもたちが嬉々として登園し、教師や友だち、遊具や玩具、環境と関わり合いながら楽しく遊ぶことを第一義に全職員で共通理解を図り、子どもの活動や遊びの環境構成を工夫している。 今後も、教育目標の具現をめざし教育の質の充実を図っていきたい。	A	評価委員が園を訪問した時も、思い思いに遊び浸る子どもたちの姿が見られた。友達と一緒にふれあいながら生き生きと遊ぶ園児の姿もあちこちで見られた。こうしたことから、目標の達成度は高いと評価できる。 また、保育室内の整頓もされており、生活の安定が感じられた。 今後とも、教育目標を意識した教育経営を推進して行ってほしい。
本年度の重点	計画性のある保育実践	B	近年、天候が不安定で、寒暖や、季節の変化と保育の計画との兼ね合いが難しいことが多い。おもに自然を相手とする保育計画においては、夏季の高温に対する配慮と、活動の安全対策が重要となってきた。 また、畑づくりや、収穫等においては、気象条件もさることながら職員の知識や専門性も必要になってくると感じる。	B	コロナ禍を経て、これまでの行事等を改めて見直す機会としてきた中で、一度に全て見直すのではなく、可能な範囲で見直していくのはどうでしょうか。
本年度の重点	笑顔で保育実践	A	教職員が、常に笑顔で、優しい言葉掛けを実践することで、子どもや保護者との信頼関係や良好なコミュニケーションが生まれ、互いの信頼が深まる。今後も「和顔愛語」の精神、「子どものよさや努力を認め伸ばす気持ち」を忘れずに保育や接遇に臨んでいきたい。	A	本園の先生方の素晴らしいところは、いつも笑顔を忘れず、どの子どもにも優しく接してくれるところです。そのため、どの子も安心して園生活を送ることができています。こうした子どもの姿から、親の幼稚園への信頼が生まれます。「教師は最大の教育環境である」といわれるように、保育者は常に笑顔で子どもの保育に当たってほしいと思います。
本年度の重点	信頼される保育実践	B	「環境」の整備・園庭遊具の移動と修理をおこなった。 満三歳入園児がふえたことで、発達段階にふさわしい遊具を選定しながら遊ぶことの必要性を感じ、遊具のレイアウトと、使用できる年齢を変更した。子どもたちも約束を理解し、上手に遊ぶことができた。 子どもの遊びの安全性を確保し、保育者からの見通しのきく環境となったことは、保護者に対し安心感を与えうる実践となった。	A	保護者と幼稚園との意思疎通のための情報発信をお願いしたい。 ホームページ、ブログ、動画等にて園での様子はよくわかるので、幼稚園の指導の延長線上にある、子どもへの声掛けや、子育てのヒントを発信してほしく思う。 登降園時の安全確保や園内での安全管理については常にアンテナを高くして、予防し、子どもたちの安全確保に努めてほしいと願っています。
子育て支援	預かり保育 (あさやけ教室、 ゆうやけ教室)	A	預かり保育では、時代のニーズ並びに保護者の要望に対応し、預かり時間を朝8時から夕方18時まで延長するなど改善し喜ばれている。 さらに、夏休みや冬休み・春休み等の長期休業中の開室日数をふやし、給食の提供もはじめた。しかしながら、入室児の増加と教職員の勤務時間・シフトの組み方等に工夫がいるため、苦慮しているところでもある。	B	預かり保育は、異年齢の友達と触れ合ったり、日常の保育では味わえないアットホームな遊びを存分に体験できる魅力もあります。 一方、保護者の側からすると、保護者のニーズに応え、「開室時間」や「開室日数」の拡張等改善を図ってくださっていることはおおいに評価できます。 その際、教職員の皆様の勤務シフトが円滑に進むことを願っています。

4 今後取り組むべき課題

課題	具体的な取組方法
「計画性のある保育実践」の遂行と行事の吟味	今年度の夏季の気温の上昇が甚だしく、日々の熱中症警報に注意を払いながら保育計画をすすめることが、必要であった。 園外保育、宿泊保育、プール活動などにおいても、下見をしたうえで、気温の上昇、アラートの発生などに配慮しつつ、子どもたちの経験や活動を安全に、かつ充実させるための保育計画をたて、実践した。 以前とは、違う環境のなかでは、これまで通りの保育計画を遂行することなく、勇気を持って中止や変更することを職員間で共有していかなくてはならない。

